

「新之助」生育速報 No. 6

平成30年7月19日
村上農業普及指導センター

1 生育調査ほ・実証ほにおける生育状況（7月19日現在）

生育概況

草丈: やや長 茎数: 少~やや少 葉数: やや遅~遅 葉色: やや淡~淡

- 梅雨明け後の好天、高夜温により、褪色が急激に進んでいる。
- 幼穂形成期は前年より1日程度早い7月24日頃と予想される。
- 葉いもちの発生が各地で確認されている。

新之助生育調査ほ・実証ほの調査結果(7月19日現在)

調査場所	田植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
関川村下関(関川)	5月15日	64	446	11.4	33.5
村上市牛屋(神林)	5月15日	65	510	12.2	32.2
村上市岩沢(朝日)	5月20日	63	466	12.3	28.9
平均	5月16日	64	474	12.0	31.5
指標値	5月15日	58	540	12.7	34.0
【参考:前年平均】	5月17日	62	499	12.2	33.2

2 今後の技術対策

当面の管理のポイント

◎幼穂形成期の確認

- ・幼穂形成期（幼穂長が平均1mm以上となった時期：出穂の23日前）を必ず確認し、穂肥施用が遅れないよう準備する。
(※ 現在の幼穂形成期の予想は、管内平均で7月24日頃)

◎穂肥施用

- ・穂肥については、出穂21日~18日前（1回目：幼穂長5~10mm）と12~10日前（2回目）の2回に分けて施用する。
- ・穂肥量は、1回当たり1kg/10aとし、合計2kg/10a施用を基本とするが、地力、葉色、気象予報などから判断して、1回当たり1.5kg/10aを上限に施用量を調節し栄養凋落を防止する。
- ・出穂期10日前以降の穂肥は、食味を低下させるので原則施用しないが、異常高温（猛暑）で栄養凋落が予想される場合には、出穂3日前頃の追加の穂肥も検討する。
- ・有機質100%肥料肥料は肥効が安定しないので使用しない。

◎水管理

- ・中干しを終了させ、間断かん水とし、幼穂形成期以降は飽水管理とする。特に稲体は減数分裂期から出穂・開花期にかけて最も水を必要とするので水が不足しないようにする。
- ・異常高温、強風、フェーン時には速やかに湛水し、稲体の急激な蒸散防止に努める。
- ・輪番給水地域は、気象予報等に十分注意し、異常気象が予想される場合は給水可能な日にあらかじめ十分湛水するなど事前に対応できるよう水管理に努める。

◎いもち病対策

- ・葉いもちの発生が各地で確認されている。当面は高温のため感染にくい条件が続くと予想されるが、いもち病に非常に弱い品種のため、葉いもちを認めた場合には、直ちに防除する。
- ・穂いもち防除は、葉いもちの発生がない場合でも、出穂前の適期に粒剤を水面施用するか、又は出穂期の状況に合わせ、粉・液剤で2回（出穂期直前と穂揃い期）の予防散布を実施する。
- ・共同防除は、新之助の防除適期とならない場合が多いので、その場合には、新之助に合わせた防除対応を行う。

◎斑点米カメムシ対策

- ・県病虫害防除所の7月前半調査では、下越地域のアカスジカスミカメの発生が平年に比べやや多い（確認地点率）
- ・薬剤防除は共同防除などでコシヒカリと同時に実施してよいが、付近に多発生地があるなど多発生が懸念される場合は追加防除を行う。
- ・農道・畦畔の定期的な草刈りを継続するとともに、水田内にノビエやホタルイなどの雑草が目立つ場合は抜き取りを行う。